

第4章 類似事例の整理

4-1. 歴史上の人物や偉人を活用したまちおこし事例

1 小田原市無尽蔵プロジェクト

神奈川県 小田原市

(1)活用した作品・人物の概要

江戸後期の農政家にして、農村復興の指導者。通称、二宮金次郎として知られる。相模国栢山村（現小田原市）の出で、早く父母を失い、伯父の家を手伝いながら学問に励んだ。のちに家を再興し、その後小田原藩士服部家の再建（1818年より）や同藩領下野国桜町領の農村復興（1837年より）に成功した。

二宮尊徳生家に隣接する記念館は、彼の生涯や、その教えを学ぶ展示室のほか、会議室や宿泊室を備え、講座、サークル活動等の生涯学習活動の場として利用できる。

(2)取り組みの概要

①無尽蔵プロジェクトの目的

無尽蔵プロジェクトとは、市民と行政が一体となり、無尽の英知を持って小田原市の持つ特徴と潜在力を引き出し、新たな「小田原スタイル」を確立させることで、地域経済の活性化とまちの活力向上を目指すプロジェクトである。「無尽蔵」とは二宮尊徳の「徳は無尽蔵にあり」という言葉からきている。日本計画行政学会の第14回計画賞で最優秀賞に選ばれた。

プロジェクトの原点は、従来の「市民参画の推進」が、結局のところ資金も人材も行政の丸抱えになりがちだったという反省にある財政難の折から、こうした企画は「1年で打ち切り」になることもあり、「そもそも行政単独での事業実施は限界を迎えている」という状況だった。そこで補助金以外での市民への協力の方法を検討する作業が始まり、市の施設の貸与といった「お金のかからない協力」へと転換していくこととなった。そして民間が稼げば、結果的に人が集まり、経済効果が生まれ、税収も増えるという考え方を基本に「無尽蔵プロジェクト」が生まれた。

1. 「梅」「ひもの」「小田原城」などといった資源を売り出すことに加え、交通の利便性、食の安全性、ものを大切にす文化、農のある暮らし、など恵まれた小田原の資産を「切り口」として、新たな魅力（セールスポイント）を作り出し、市内外の人々に訴えます。
2. 小田原ファンは意外と多く、暮らしの質を高めたいと望む人々のニーズに合致するものは沢山あります。小田原で実現できる質の高い暮らしを「小田原スタイル」と呼び、戦略的に発信することで、交流人口のみならず定住人口の獲得までつながる取り組みがきっとできるはずです。
3. 行政が従来から取り組んできたまちづくりと並行して、民間企業や団体を中心とした「市民力」による自由な発想と活力を取り入れることで、多くの人々にアピールする「小田原スタイル」を形にしていきます。

②プロジェクトの内容

「市民と行政の協働」を具現化したプロジェクトからなり、食やものづくり、環境をテーマに以下の10のプロジェクトがある。

例えば「ウォーキングタウン小田原」では、市は国指定史跡の清閑亭を所有するものの有効利用が図れずにいたため、NPO法人小田原まちづくり応援団に管理運営を委託した。応援団は、清閑亭の一般公開やコンサート、展示会の受け入れ等を企画したり、館内に喫茶コーナーを設けるなど、市民目線の運営手法で集客と資金の確保を両立させている。清閑亭は小田原の他の街並みや施設を回遊する拠点となっている。



無尽蔵プロジェクトの主な事業

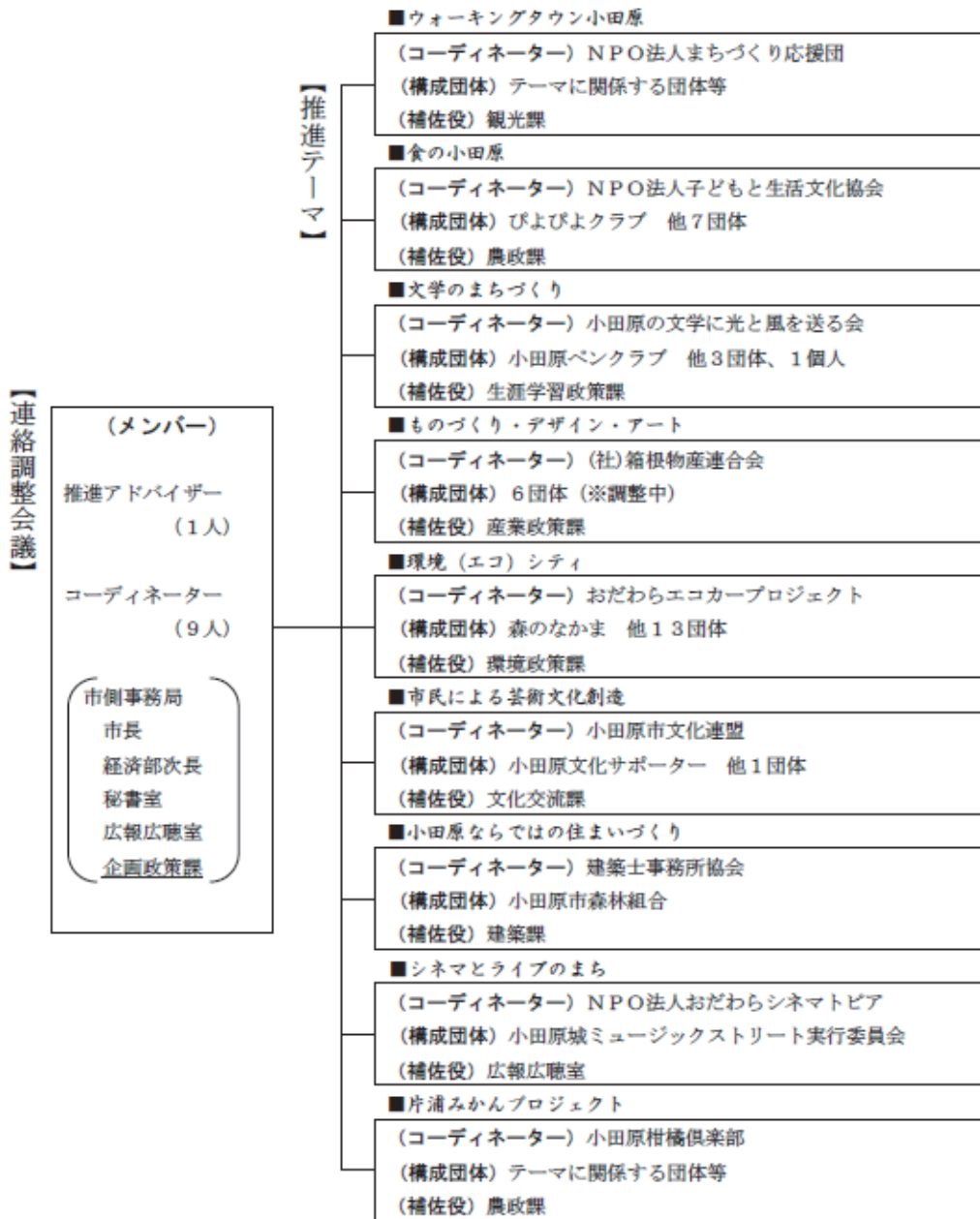
プロジェクト名	内容
ウォーキングタウン小田原	まちを歩いて楽しめる観光地を創る
文学のまちづくり	「文学」をキーワードとして、小田原地域の有形無形の文化資源に光をあてる
食の小田原	食を通じて「地域の人たちのつながりの回復をはかること」「安全な食品による市民・子どもたちの健康の実現」を目指す
ものづくり・デザイン・アート	匠の技を受け継ぐと同時に、次世代を担う新しいものづくりの仕組みを創る
わがまち振興	地域における生産物の販売や定期的なマーケットの展開につながる仕掛けづくりを目指す
環境(エコ)シティ	小田原の環境の過去・現在を調査して、エコな街の未来を考える
市民による芸術文化創造	レベルの高い多様な文化芸術の活動をつなぎ、育て、担い手の裾野を広げる
小田原ならではの住まい作り	「住みやすい街とはどんな街」という問いのもと、小田原地場産の材料の一般市場への流通の可能性を探る
シネマとライブのまち	まちが感性豊かな文化都市として発展していくことを目指す
小田原スタイルの情報発信	「市民力」による自由な発想と活力を導入し、全国に発信する

③取り組みの方針と作業体制

無尽蔵プロジェクトは、それぞれの分野で活躍している企業や団体のメンバーが中心となっており、49団体と個人14人が関わっている(2012年3月時点)。市の所管課も補佐役として参画する。プロジェクトは以下のような方針と体制で進められている。3カ月に1回、市担当者らを交えた連絡調整会議を開いて、各事業の方向性をチェックしている。

- 各分野の実践の場で活躍している団体(企業等)が主となり、プロジェクトを組織します。
- プロジェクトでは、二宮尊徳翁の実践的教えに倣い、互いの考えをぶつけ合って議論をし、目指すべき目標と達成に向けた企画案のアイデア出しを行います。
- その後、お互いが実際にできることは何かを整理し、役割分担をします。
- 各団体(企業等)は、自らの役割において取り組みを実践していきます。またプロジェクトには、市の関係する所管課が補佐役として参画します。
- 各推進テーマにおける進行状況や取組内容等の情報を共有し、意見交換をする場として、「連絡調整会議」を設置します。各推進テーマのコーディネーター、市長、アドバイザーらが出席し、意見を交わし、情報の交換を行います。

無尽蔵プロジェクト推進体制



(1)活用した作品・人物の概要

平清盛は平安時代末期の武将、平氏の棟梁。武士で初めて太政大臣に任じられた。平成24(2012)年には清盛を主人公としたNHK大河ドラマ『平清盛』が制作された。大河ドラマ放送を契機として、清盛ゆかりの地である広島県のイメージアップを図るとともに観光客誘致の促進と経済活性化につながるキャンペーンを展開している。

(2)取り組みの概要

①平清盛の新たな人物像の構築

大河ドラマ放送に先立ち、「大河ドラマ『平清盛』広島県推進協議会」（広島県商工労働局観光課内）を立ち上げ、公式ホームページを開設。清盛ゆかりの地の紹介や、それらをめぐるモデルコース等を紹介している。

また、本事業では『平家物語』に代表されるように元来悪役として描かれがちであった清盛像を見直し、新たに「武家政権の基礎を確立した変革者」「人情に厚く、家族思いの人物」等の肯定的なイメージを発信することに重きをおいており、ホームページ上でも

「実は優しい性格だった」という見出しでエピソードを紹介したり、研究者による学術講演や連載コラム等でも悪役のイメージを払拭するような清盛の功績・人柄を見直すことを確認している。また、事業のイメージキャラクターはこれまでの清盛の入道姿のイメージを一新するため、青年武士「ひろしま清盛」となっている。



ひろしま清盛

②ホームページを軸にした様々なPRキャンペーン

協議会では、広報・宣伝プロデューサーに民間のPRの専門家を起用し、清盛のイメージ再構築のために民間の効果的なPR方法を反映させようと試みている。

広島と平清盛のPR活動を行う「ひろしま清盛隊」として、地元アイドルグループ、シンガーソングライターの嘉門達夫等が就任し、県内外のイベントに出演。嘉門達夫は「平成の琵琶法師」というキャッチフレーズの下、『平家物語』とは異なる清盛の功績や明るい人物像を全面に押し出した「ゆけ！ゆけ！平清盛！！」というテーマソングでPR活動を行った。その他、大河ドラマと連動した展示を行うドラマ館での企画展、多種多様なグッズ販売、清盛ゆかりの地をモデルとした絵画・フォトコンテスト、商店街活性化のためのスタンプラリーなど多くの関連事業を展開する。これらの事業は、公式ホームページ上でその都度告知・レポートされ、協議会が行うPRキャンペーンの軸となっている。



また、ホームページからは公式マスコットキャラクターおよびロゴタイプをダウンロードでき、協議会以外の諸団体等でも無料で使用することが可能（商業利用は申請が必要）。宮島町商工会では、キャラクターを利用したシールやレジ袋を作成し、地元のイメージアップやリピーターの増大を図っている。

ひろしま清盛公式ホームページ(<http://www.hiroshima-kiyomori.jp/>)

(1)活用した作品・人物の概要

■**概要:**織田信長は戦国時代から安土桃山時代にかけての戦国大名。畿内を中心に強力な中央政権を確立した。尾張に生まれ、攻略の過程で美濃、安土などに居城した。

■**活用の視点:**織田信長にゆかりのある自治体が共同でPRをし、観光客誘致や経済の活性化を推進する。

(2)取り組みの概要

■**織田信長サミット:**織田信長に関係する地方公共団体の首長、観光協会長等が集い、信長を活用した地域活性化のため開催する会議。昭和59（1984）年に滋賀県安土町（現・近江八幡市）が提唱し、同町にて第1回が開催された。これまでに計24回開催され、愛知県名古屋市、山形県天童町等、平成24（2012）年現在10の市町が参加している。サミットでは、魅力あるまちづくりについて協議するフォーラムの他、学術シンポジウムや古式銃の演武、歴史巡見など様々な関連イベントが行われる。

■**信長公の夢街道(信長公居城連携協議会):**織田信長サミットにも参加している市町の内、信長の居城のある岐阜県岐阜市、滋賀県近江八幡市、愛知県小牧市、愛知県清須市の4市で成る協議会。それぞれの市が持つ信長ゆかりの資源をひとつにつなげて連続した物語にすることで、広域の観光振興を共同で推進することを目的とする。

信長に関するフォーラムやゆかりの地を巡るツアー、信長のイラストを公共バスにプリントするといった事業を行っている。また、4市を巡り「信長公の居城」をPRするバスツアーを企画・造成した旅行者に対して補助金を交付している。



「信長公の夢街道」の主な取り組み事業

取り組み	内容
信長の歴史制覇4城めぐり	信長の居城であった清洲・小牧・岐阜・安土の4城を、ボランティアガイドや武将に扮した観光PR部隊と巡るツアー。参加者も甲冑を着用する体験などがある。
信長夢街道スタンプラリー	信長の4居城を巡り、各場所のスタンプを集めて応募すると抽選で記念品が贈呈される。
織田信長ウォーキング	小牧市、名古屋市、清須市を舞台とした全4コース(野望コース、青春コース、桶狭間の戦いコース、出世街道コース)を散策する。
信長学フォーラム	「信長公」をテーマに基調講演やパネルディスカッション等を行うシンポジウム。
信長・戦国歴史検定	信長を中心に、戦国時代の基本事項から歴史家や作家の研究成果等を取り入れ、ダイナミックな歴史を伝えていくことを目的とした検定試験。
タイムスコープ版VR安土城	VR(仮想現実)を用いた安土城の再現により地域振興を目指す。アプリを利用し、定められた地点でiPad・iPhonをかざすと当時の風景が出現するというもの。

(1)活用した作品・人物の概要

■概要:名古屋にゆかりのある武将6人（織田信長・豊臣秀吉・徳川家康・加藤清正・前田利家・前田慶次）と4陣笠隊で結成。武将は戦国時代から江戸時代にかけての有名な戦国大名である。

■活用の視点:名古屋城400年に合わせて、名古屋の魅力を全国に伝えるために2009年11月に結成。主な活動内容は、名古屋城での観光客のお出迎え・観光案内・記念撮影などの「おもてなし」の他、イベントやメディア等でのPR活動を行っている。

(2)取り組みの概要

■武将隊六訓:「人と文化と歴史の、絆を結ぶ」ため、武将隊のミッションとビジョンとして「武将隊六訓」という6つの目標を掲げる。内容は「一、おもてなしの頂点をめざす」「一、歴史ロマンの語り部たらん」「一、魅せる、楽しませる、芸をみがく」「一、地域の魅力を世界に誇る」「一、伝統文化を継承し、発信する」「誠実で一生懸命であること」となっており、それぞれの活動につながっている。

■名古屋城での活動:名古屋城ではほぼ毎日武将が練り歩き、記念撮影や座談会を行う。武将本人が当時の言葉で話す戦国時代のエピソードや武将としての知識に裏打ちされた観光案内もある。土日には、武将隊が結集してのエンターテイメントショーを行う。

■イベント・メディア出演:名古屋市内や国内外でのイベント出演、メディア出演などを行い、名古屋をPRしている。

■情報発信・商品販売:公式HPの他に、ブログやメールマガジン、公式オンラインショップを開設。ショップでは、名古屋の伝統産業とタイアップして開発された商品や書籍やCD・DVD等が販売されている。



おもてなし武将の主な取り組み実績

取り組み(武将隊六訓)	内容
おもてなしの頂点をめざす	名古屋城にてほぼ毎日武将が練り歩き、記念撮影や座談会を行う。土日祝日には、名古屋城二の丸広場にて武将隊が集結し、臨場感あふれる「殺陣」や「寸劇」「甲冑ダンス」などのエンターテイメントショー(「おもてなし演舞」)を行う。
歴史ロマンの語り部たらん	名古屋港海賊クルーズ(名古屋港)、武将隊歴史事業(アピタ桃花台)、大名古屋歴史授業(SMBCパーク栄)など、武将隊によるガイドや歴史解説を行う。
魅せる、楽しませる、芸をみがく	ファンクラブの集い、演舞DVDの販売、フォトブックの販売
地域の魅力を世界に誇る	東海地域のモノづくりツアー、映画「スターウォーズ」の公開記念に訪れたダースベーダーとの対面、上海万博や「舞之祭IN台湾」などの海外イベントへの出演。
伝統文化を継承し、発信する	三線奏者の共演、作陶体験・絵付け体験の開催、名古屋の伝統産業とタイアップした扇子、有松鳴海絞りなどの特産品、弁当の開発。
誠実で一生懸命であること	高齢者向けの地域学習会での講座、ごみ拾い合戦への参加。

(1)活用した作品・人物の概要

江戸中期の朱子学者。木下順庵の高弟で、「文は芳洲、詩は白石」と称されるなど文章の秀逸さは木門随一で、師は「後進の領袖」と評した。その推薦により対馬藩に仕え、この藩の主要政務である朝鮮との応接に活躍した。朝鮮語、中国語に通じその声名は内外に高かった。また、名分を重んじ、同門の新井白石と將軍王号問題で論争した。高月町においては、雨森芳洲のことを非常に尊敬し、誇りにしている。

(2)取り組みの概要

①雨森地区のまちづくり

雨森地区は人口500人、戸数100余りの農村で、昭和59年に「東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」が建てられ、地区住民による美しい村づくりがスタートとした。昭和60年に滋賀県は「ふるさと滋賀の風景を守り育てる条例」を制定し、雨森地区は第1号の認定を受けた。現在、雨森芳洲をシンボルとして、対馬藩に仕えた芳洲が朝鮮外交に奔走したことに倣い、韓国との交流をはじめ、「鯉と水車と花いっぱいふるさと」づくりを進めている。芳洲の心である国際理解、善隣友好の実践を通して、その思想を21世紀の青少年育成や人材育成、国際交流、まちづくりにいかした以下のような事業を行っている。



- ・韓国青少年のホームステイ・交流活動
- ・釜山の小学校との姉妹校交流
- ・商工会の特産品づくり「キムチ委員会」
- ・「サムルリ」チームの結成
- ・釜山のロータリークラブとの姉妹提携
- ・町が進める「青少年国際交流推進事業」

②町民の心に根づく尊敬の念

戦前は地元の保育園の朝の挨拶は「芳洲さん、おはようございます」と唱和されていた。しかし、昭和38年に大企業が進出し、製造工場が近くの長浜市にでき、そこへ働きに行く人が増え、村民の約半数がサラリーマンになった。昭和40～50年代には地域の人々は思いやりの心がなくなり、挨拶もしなくなった。昭和50年代には、村から子どもの姿が見えないようになった。

そこで、昔の心の豊かさを取り戻そうとする運動が始まる。まず壮年会をつくり、それを核に村民が集う広場をつくり、イベントづくりを始めた。芳洲庵や寺では、日曜学校を起し、子どもたちは座禅を組んだり、住職の説教を聴いた。村の運動会や祭りには必ず全員参加とし、乳幼児もハイハイ競争に参加するなど、村の子どもの育てる風潮ができた。水路には、四季の花々や水車を設け、錦鯉を放流した。隣保で責任を持って飼う。夏休みの部活の終わった後の時間は中学生も参加させた。

今では集落を歩けば、出会う小学生たちがみんな「こんにちは」とあいさつをしてくれる。

(1)活用した作品・人物の概要

■概要:『名探偵コナン』は青山剛昌原作の推理漫画。平成6（1994）年に連載開始し、累計発行部数は1億4千万部（2012年9月現在）。

■活用の視点:原作者・青山剛昌の出身地である鳥取県北栄町（旧大栄町）において「コナンの里づくり」をキーワードとした観光振興やまちづくりを図る。

(2)取り組みの概要

■まちづくりビジョン:「北栄町まちづくりビジョン」における基本目標のなかで、『名探偵コナン』をオンリー・ワンの観光資源として、さらに魅力を高めることで特色ある観光振興を図るとし、名探偵コナンに会える町として、コナンの里づくりとコナンを活用した観光ルートづくりを推進するとしている。

■コナン通り:旧大栄町の頃よりコナン通りやブロンズ像等の整備が行われてきている。合併後の平成19（2007）年にはコナン通りに青山剛昌ふるさと館が完成し、ここを北栄町の観光の拠点施設として、地域資源を活用したまちづくりを進めている。



(1)活用した作品・人物の概要

■概要:水木しげる原作の漫画『ゲゲゲの鬼太郎』。主人公の鬼太郎を中心として様々な妖怪が登場する。誕生から半世紀を経た現在でも映画やアニメ等の関連作品がつくられている。

■活用の視点:原作者・水木しげるの出身地として境港市をPRし、観光振興を図る。

(2)取り組みの概要

■まちづくりの基本指針での位置づけ:まちづくりのキーワードのひとつを「さかなと鬼太郎のまち境港」として、平成5（1993）年に完成し、現在では全国的な観光地へと成長した「水木しげるロード」を核とした観光振興と、水産の相乗効果により地域経済の振興を促進するとしている。

■水木しげるロード:水木氏の作品に登場する妖怪たちのブロンズ像が並ぶ、境港の駅前の通り。ブロンズ像は平成24（2012）年現在で139体ある。通りには「水木しげる記念館」があり、平成22（2010）年には会館以来の入館者数が200万人を突破している。



4-2. エコ・ミュージアム、まるごと博物館の事例

1 『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想

愛媛県 松山市

(1)活用した作品・人物の概要

司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』(1968年から1972年にかけて産経新聞紙上で連載)。作中には、松山市出身の俳人正岡子規、軍人秋山好古・真之兄弟の3人が登場。小説では3人の高い志と前向きな発想が書かれるが、その思想を育んだ郷土が松山であり、松山には彼ら3人を育てた自然、文化、風土が今も数多く残っている。

(2)取り組みの概要

①総合計画での位置付け

「第五次松山市総合計画」(平成15年度～平成24年度)では、まちづくりの基本理念を「『坂の上の雲』をめざして」とし、また、将来像実現のための重点的取り組みのひとつとして「物語のある観光日本一のまちづくり」「『坂の上の雲』を軸とした21世紀のまちづくりを推進する」ことを位置付けている。

②『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想

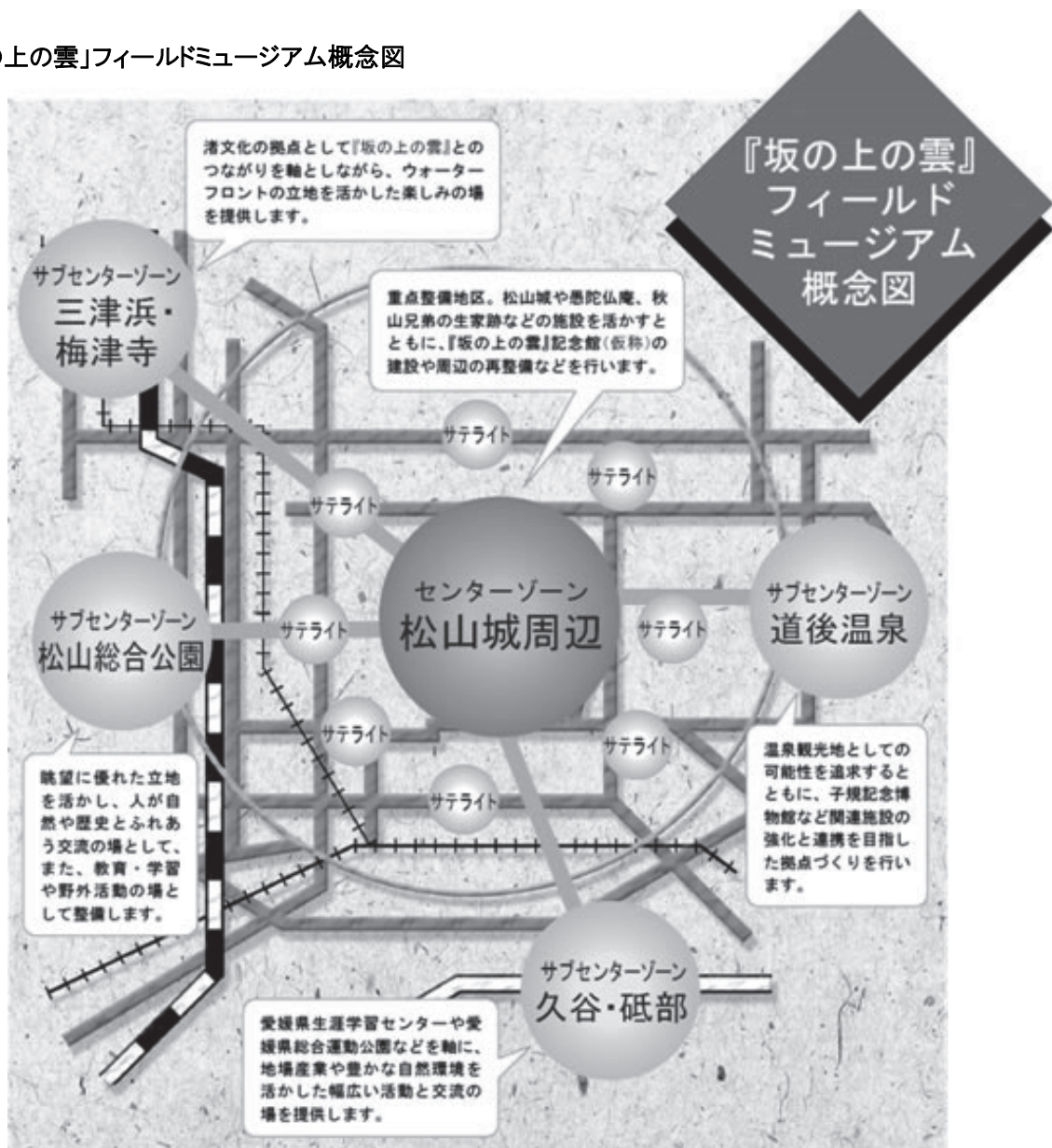
市内を「屋根のない博物館」と捉え、市内に点在する資源を結びつけ、回遊性を高めた物語のあるまちにしようとする構想で、松山城を中心としたセンターゾーンと、市内各地に4つのサブセンターゾーンを設定し、それぞれで地域資源を発掘、整備しつつそれらを結びつけるもの。

また、構想の展開にあたっては「21世紀のまちづくり」として、施設整備を中心とする器づくりだけではなく、まちづくりに向けた啓蒙活動やイベント・施設の立ち上げ、市民が運営に参加するための組織化等、市民と行政が一体となった多様な活動の結果つくり上げられるものであるという考えのもと、市民参加をキーワードに「幅広い環境づくり」を行っている。

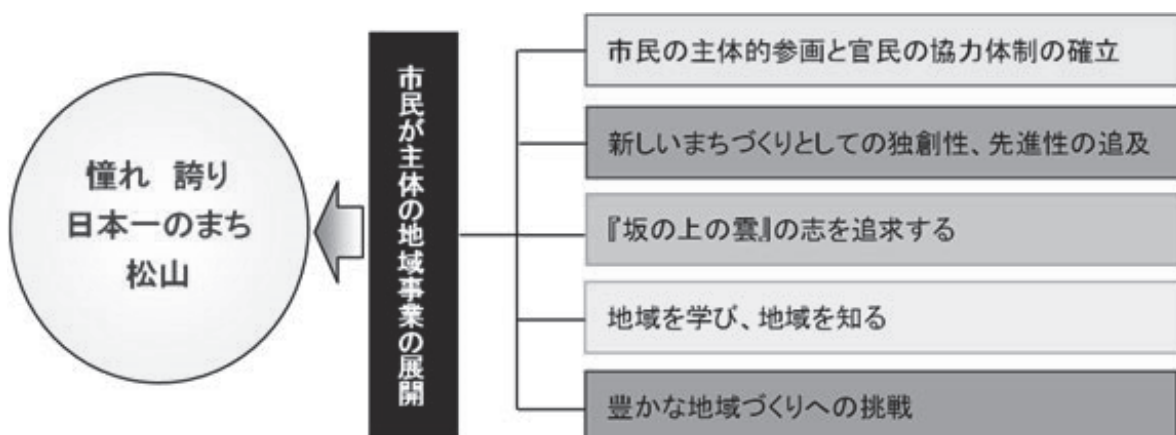
ゾーンの考え方

ゾーン	概要
松山城周辺	センターゾーン。重点整備地区と位置付けられ、松山城や愚陀仏庵、秋山兄弟の生家跡等の施設を活かすと共に、「坂の上の雲ミュージアム」の建設・周辺整備を行う。
三津浜・梅津寺	サブセンターゾーン。渚文化の拠点として「坂の上の雲」とのつながりを軸としながらウォーターフロントの立地を活かした楽しみの場を提供する。
松山総合公園	サブセンターゾーン。眺望に優れた立地を活かし、人が自然や歴史と触れあう交流の場として、また教育・学習や野外学習の場として整備する。
久谷・砥部	サブセンターゾーン。愛媛県障害学習センターや愛媛県総合運動公園等を軸に、地場産業や豊かな自然環境を活かした幅広い活動と交流の場を提供する。
道後温泉	サブセンターゾーン。温泉観光資源としての可能性を追求するとともに、子規記念博物館等の関連施設の強化と連携を目指した拠点づくりを行う。

「坂の上の雲」フィールドミュージアム概念図



まちづくりへの取り組みの考え方



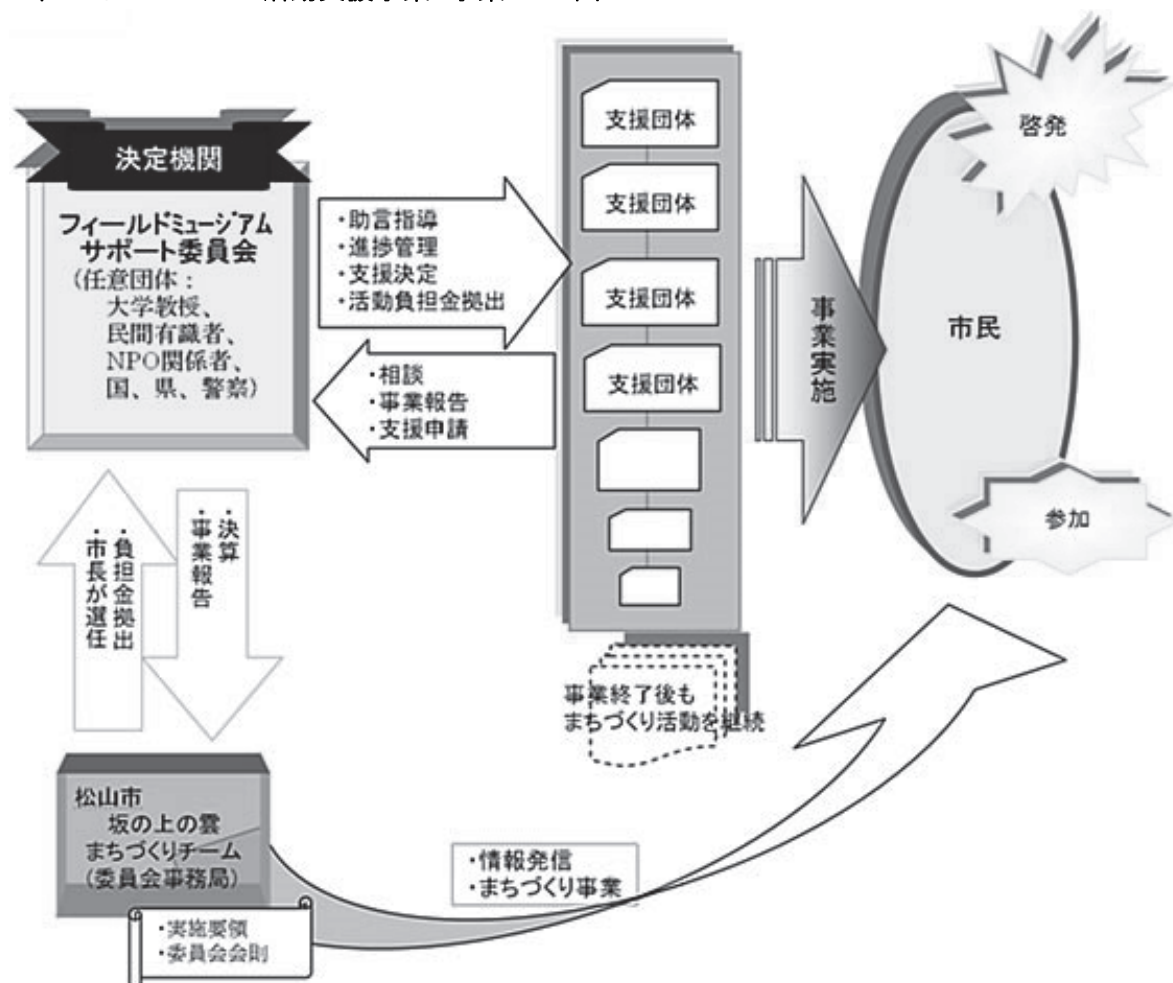
「坂の上の雲」のまちづくり 主な取り組み事業

取り組み	内容
『坂の上の雲』まちづくり市民塾	行政主導ではなく、市民レベルでの幅広い参画が必要不可欠であることから、まちづくりについて市民自らが学習し、自由な立場で意見の言える場として運営。
『坂の上の雲』まちづくり勉強会	市民と共に元気なところざしのあるまちづくりを目指して、『坂の上の雲』をテーマに勉強会(講演会等)を随時開催。年に1、2回の割合で、建築家の安藤忠雄氏やフライブルク市長などを招き、多くの市民にまちづくりへの関心をもってもらう機会となっている。
『坂の上の雲』ウォーク	『坂の上の雲』に描写されている、常に前向きに生きた明治の青年たちの志を学ぶとともに、市民に自分たちの郷土の歴史、風土、文化を再認識するため、毎年10月、市内(年ごとに違う地域)でふるさとウォークを実施。

③フィールドミュージアム活動支援事業

松山市では、平成16年より、官民の協働による新しいかたちのまちづくりを進めることを目的に「フィールドミュージアム活動支援事業」を実施している。これは、「坂の上の雲」フィールドミュージアム構想の具現化活動として、実効性のある公共施設をはじめ地域資源の利活用に主体的に取り組もうとするNPOや市民団体を助成するもので、事業開始以降、市内各地で地元住民や市民団体の自主的な活動により様々な地域資源が発掘され、地域の魅力アップと市民参加のまちづくり機運の醸成につながっている。

フィールドミュージアム活動支援事業 事業フロー図



フィールドミュージアム活動支援事業を活用した活動事例

取り組み	取り組み場所	内容
ロープウェイ街周辺における地域財産を活用したまちづくり	松山城周辺	まちの再生をテーマに、松山城・ロープウェイ街を中心とした地域財産を活用したイベントの企画運営を通じて、若者や周辺住民のまちづくりに対する意識の高揚を図っている。(スキップ)
まちのむかしが息づくまちづくり	道後温泉	松山の昔話を掘り起し、松山らしい場所において伊予弁で語る「松山の昔話を聞く会」等を地元老人クラブの協力を得て開催し、まちの発見・再評価を行っている。(青春亭 お伽座)
道後ネオン坂再生計画調査	道後温泉	ネオン坂のにぎわいを地域住民とともに考えていくためのしくみづくりと朝日楼を有効活用するためのコミュニティビジネス案の検討計画を行っている。(アジア・フィルム・ネットワーク)
潮騒文化再生による高浜まちづくり	三津浜・梅津寺	「ターナー島」を軸とする地域資源にスポットをあて、島を多くの市民にってもらうためのクルージングの実施や、島を眺望できる「なめこ山」の利用を目指して草刈・正宗等の活動が行われている。(ターナー島を守る会)
潮騒文化再生による高浜まちづくり	三津浜・梅津寺	三津浜のまちとその文化、風土など地域の魅力を発掘し、市民と共有するために地域住民や大学生、NPOなどと連携を図りながら、スタンプラリーや歴史的建造物の調査、展示などを行っている。(平成船手組)
地域性を生かした里山再生まちづくり	久谷・砥部	久谷の地域性を生かすため、昔の遍路道と遍路文化を掘り起す活動を実施。地域の文化・自然のすばらしさを体感する「遍路ツーリズム」や「里山ウォーク」を実施している。(NORA)

2 あさひまちエコミュージアム

山形県 朝日町

(1)朝日町の概要

朝日町は山形県の中央部に位置し、面積196.3km²、人口は8600人の中山間地域の自然豊かな町で、町の西部には磐梯朝日国立公園朝日連峰が、中心部には南北に最上川が流れる。最上川の河岸段丘には肥沃な農地が広がり、りんごを中心とした果樹栽培が基幹産業となっている。

朝日町は早くから生涯学習のまちづくりに積極的に取り組んでおり、昭和62年には「生涯学習推進協議会」を設置し、全国に先駆けて生涯学習推進体制を立ち上げている。エコ・ミュージアム構想もこの流れを汲むものである。

(2)あさひまちエコミュージアム構想

①構想策定の経緯

昭和63年、町にある自然を活かし、自然と共生できる観光地づくりを目指して、町営のエコ・ミュージアム館」が建設された。その活動の中で、まちづくりを町だけに任せるのではなく町民も関わっていかこうとする動きが活発になり、エコ・ミュージアムの概念が第3次総合開発基本構想に取り入れられることとなった。

平成元年には朝日町エコ・ミュージアム研究会が組織され、平成3年にエコ・ミュージアム基本構想がまとめられた。この構想では「エコ・ミュージアムは、朝日町民にとって見学者であると同時に出演者であり、町はまるごと博物館になり、住民は誰でも学芸員になる」と記され、住民がまちをよく知ることによって、誇りを持って生活できるまちづくりを提案している。

②概要

朝日町エコミュージアム コアセンター「創遊館」を中核とし、町内の自然、文化、産業等の分野の中から町の大切なものを選び、16箇所をサテライト（現地見学場所）としている。

エリアとして選定された資源以外にも「あさひまち宝さがし」として、次世代へ残したい朝日町の「宝（自然・文化・歴史・有形無形にこだわらない）」を募集し、町民から報告された「宝」について町民等から聞き取り調査を行っている。調査事業で得た情報は、カルタを作成したり、シンポジウム・ワークショップ、展示、出版、案内事業等の活動を通して普及を目指している。

また、あさひまちエコミュージアムデータベース（<http://asahi-ecom.jp/>）としてエリア情報をインターネットで公開し、観光客等が自由に観覧できるようにしている。

朝日町エコミュージアムマップ



エリアの概要

エリア・施設	概要
コアセンター「創遊館」	平成12年に完成した施設で、エコ・ミュージアムのコア施設としての機能だけでなく、文化会館、中央公民館、図書館、それぞれの機能を持った複合施設となっている。
朝日連峰エリア	日本有数の原始的自然が残るとされる朝日連峰は、磐梯朝日国立公園の主要な部分をなし、数百年を越すブナ原生林や鉾山植物の群生が見られる。ブナの森についてのエコミュージアムサテライトもある宿泊施設「朝日鉱泉ナチュラルリストの家」は、登山や溪流釣り、山菜・茸採り、自然観察の基地として利用されている（見学は問合せが必要）。
朝日川エリア	山形県内で最もきれいな川の一つとされる「朝日川」は、イワナやヤマメ、カジカなどが棲み、溪流釣りや川遊びに多くの人が訪れる。夏には「溪流まつり」が開催。また、渓谷に広がる見事な自然景観は、町民有志により「朝日川十景」で表された。「旧立木小学校舎」は、子ども達の自然や芸術体験活動等に利用。

エリア・施設	概要
空 気 神 社 エ リ ア	エコ・ミュージアム・ジウム構想策定のきっかけとなったモニュメントで、豊かな自然と空気に感謝するこのモニュメントは、ブナ林の中に、5m四方のステンレス板を鏡に見立てて置いたもので、四季折々の風景がこの鏡に映り、空気への感謝をよりいっそう強く感じさせる。
佐 竹 家 エ リ ア	国指定重要文化財「佐竹家住宅」は、最上川の舟運が盛んだった頃の大庄屋の住居で、山形県内陸部における上層農家の現存する建物としては保存の状態がよく、歴史を知る貴重な民家である。また、水口地区には佐竹家が中心となって再建した十一面観音堂や、戦国時代の上杉家と最上家の戦いの場となった水口楯跡がある。
ハ ッ 沼 エ リ ア	ハッ沼地区は、中世の「ハッ沼城」があった地区で、「ハッ沼の七不思議」など伝説の多いところ。弘法大師が開いたとされる「若宮寺鐘樓堂」、原家が建立した「春日神社」、朝日町指定文化財「旧朝日町立西五百川小学校三分校舎」、湧水をうまく使うための「五本樋」など、多様な歴史や庶民の生活を伝える文化財が数多く残っている。また、高田地区には区民が休耕田を利用し作った「メダカの高田分校」があり、朝日町在来のメダカや季節ごとにホタルや糸トンボ、水生昆虫などを観察することができる。
楯 平 の 棚 田 エ リ ア	全国棚田百選(県内で二カ所)に選ばれた「楯平の棚田」。面積14ha、190枚の水田を有する。隣接する高台には「一本松農村公園」があり、この公園からは、棚田の全容を見ることができ、季節ごとに移り変わる水田の色模様や、大朝日岳や暖日山、道円山などの山並みや最上川、周辺集落など、美しい朝日町の風景を眺めることができる。
豊 龍 神 社 エ リ ア	境内には県指定天然記念物の大杉(直径7.5m)がある他、西側の丘陵「経ヶ崎」からは朝日町指定文化財「叩壺」が出土している。現在は「豊龍公園」として桜並木や東屋、芝生広場などが整備され町民のいこいの場となっている。宮宿地区には、中世の鳥屋ヶ森城主岸美作守の菩提寺だった「福昌寺」や300年の歴史を誇る「豊龍蔵」(鈴木酒造)がある。
館 山 エ リ ア	「館山(たてやま)」は、中世に最上義光に攻められ落城した鳥屋ヶ森城(とやがもりじょう)跡。頂上付近からは、宮宿盆地やハッ沼方面を眺めることができる。城下だった麓の新宿地区には、藤原時代の作とされる薬師如来立像(県有形文化財)のある「瑠璃殿(薬師堂)」をはじめ、「東永寺」「郷倉」「旧新宿警備所」「今井次郎三郎家屋敷跡」などがあり、近世までの歴史を感じることができる。
世 界 の り ん ご 園 エ リ ア	朝日町ではりんごの栽培が盛んに行われている。「りんご資料館」では、りんご栽培の歴史を知ることができる(休館中)。また、隣接する「世界のりんご園」には、13カ国170品種のりんごが栽培されており、遊歩道を歩きながら世界各国のりんごの木を見ることができる。すぐ近くの朝日連峰を眺望できる「りんご温泉」では入浴や食事を楽しむことができる。
沢 内 エ リ ア	古楨地区は、かつて蚕室の温度管理や換気を使う障子紙としての「和紙」作りが盛んに行われていた。下芦沢地区の小芦沢川は、7月初めになるとたくさんの「ホタル」の乱舞が見られ、その雅びな光を一目見ようと多くの人が訪れている。また、地区を流れる送橋川には、花嫁が濁流に流され「むかさり石」になったという悲しい昔話も残る。
杉 山 と 長 谷 地 エ リ ア	杉山から水本に広がる白鷹山麓のなだらかな高原は、湧水が豊富な地域で、ナラ林の中を流れる小さな沢の周辺にはミズバショウが群生しており、雪解けとともに美しい姿を見せてくれる。また「長谷地ため池」は明治32年(1899)宮宿の水田を潤すために柴田七郎兵衛が中心になって完成させたもので、中郷本田堰の水源地である。
五 百 川 峡 谷 エ リ ア	昭和40年頃までは、瀬を利用した築漁が盛んに行われ、現在は、峡谷の新鮮で豊富な苔が育てる“巨鮎”を求めた友釣り愛好者たちの人気スポットとなっている。また、断崖の自然美と激しい流れは、カヌー愛好者たちにとって絶好の場所となっており、その優れた自然は、町の中心部でありながら鳥など生き物たちのサンクチュアリになっていることも確認。
大 沼 浮 島 エ リ ア	国の名勝「大沼の浮島」は歴史も古く、伝説の多い昔から著名な観光地。沼の周辺はブナやミズナラの巨木など多様な植物群に覆われ沼を浮遊する島々の存在で全国的に有名。「浮島稻荷神社」は、かつて大江家・最上家・徳川家の祈願所としての役目を果たしていた。
秋 葉 山 エ リ ア	麓に開けた大谷地区は、菅原道真の子孫が移り住んだ土地と言い伝えられ「四天神」をはじめ随所にその歴史を物語る文化財が残っている。また、秋葉山と明神断崖に挟まれた真中地区には心鏡上人の黄金の橋伝説が残り、船渡地区では県内唯一の柱根が残る縄文遺跡が発見されている。
大 隅 遺 跡 エ リ ア	日本で初めて旧石器が確認された「大隅遺跡」。昭和11年(1936)大竹国治が明鏡橋工事の際に出て来た石片をただの石ではないと直感し、屋根裏に保存していたものを、昭和24年(1949)菅井進氏が旧石器であるとの確信を持ち、同人誌『縄文』に発表。

エリア・施設	概要
朝日町ワイン	朝日町のワイン製造は昭和19年に始まった。昭和27年からの大手の原酒造りを経て、昭和48年に農協の援助を受け自社ブランドの「サンワイン」を発売。昭和50年には、農協と朝日町の共同出資の会社を設立し現在地に新工場を建設。研鑽を重ね、昭和54年には新製品「朝日町ワイン」が誕生。翌年に整備された「ワイン城」では、ぶどう園や工場の一部生産工程の見学や試飲・購入もできるようになり多くのワインファンが訪れている。

3 阿蘇たにびと博物館

熊本県 阿蘇地域

(1)地域の概要

世界最大のカルデラを持つ火山「阿蘇山」周辺一帯の阿蘇地域は、外輪山内部の熊本県阿蘇市や、阿蘇郡南阿蘇村、外輪山裾野の大分県竹田市等、複数の自治体にまたがる地域。豊かな自然が広がる有数の水の産地としても知られ、外輪山内部を中心として阿蘇くじゅう国立公園に指定され温泉地等の観光業も発達している。特産物には「あか牛」と呼ばれる肥後牛や、蕎麦などがある。2009年にはカルデラ内外の地域が「阿蘇ジオパーク」として日本ジオパークに認定されている。

(2)博物館の概要

①活動内容

阿蘇たにびと博物館は、「阿蘇とアジア」をテーマに阿蘇地域全体を博物館に見立て、阿蘇に生きる人々や暮らし、自然との関わりを展示して案内するエコ・ミュージアムである。一般的な国内のエコ・ミュージアムが公営されているのとは異なり、当博物館は民営の梶原博物事務所によって運営されている。博物館であるという点を強く意識し、民俗学・歴史学・考古学・地学・植物学・動物学の各学芸員が常駐しており、博物館法の定義に則った「調査研究」・「収集保存」・「普及教育」の3つの業務を行うことを自らの役割としている。3事業のうち最も基本とする普及教育事業では、実際のフィールドを案内する常設展（阿蘇さるく）、特定のテーマを立てて展示する企画展、そして当該地域に生きる人々を「谷人」と呼び、その人々の生活を実際に紹介する特別展（谷人ツーリズム）の3つの活動を行なう。また友の会の月例会「阿蘇をさるく会」などのイベントの開催、調査研究報告書と友の会誌を兼ねる『谷人』の発行を通して、谷人たちの暮らしぶりや阿蘇の自然に関する研究成果の普及に努めている。また、阿蘇を研究する学生たちの支援をする「学生研究員制度」を設置、博物館実習、出張講義・講演などの活動も行っている。

運営資金はその多くを市民の寄付金に拠っており、博物館の活動に賛同する市民が友の会の年会費として博物館に支援する事によって調査研究を行い、活動報告書としてまとめることで友の会に返すという形で運営を行っている。

②博物館の目的

博物館が阿蘇に生きる人々の暮らしやその結果として維持されている生態系を研究してアプリシエート（認識する、真価を認める）することで、阿蘇の人々や自然に対する理解が深まり阿蘇への支援が広がる。そのことにより阿蘇の人々が元気になり仕事を頑張る。その結果としてまた

自然が保全され、それを求めてまた観光客が来る。その観光客を博物館がまた繋いでアプリシエートする、という循環と持続可能な社会をつくることを阿蘇たにびと博物館の目的としている。

(3) 取り組みの概要

① 常設展(阿蘇さるく)

1997年の開館より行われている常設展。毎日特定のフィールドを博物館の学芸員や地元の人々がガイドをする散策会。「さるく」とは九州地方の言葉で「ぶらぶら歩きまわる」という意味)



② 企画展

自然探索や集落探索ツアーなど様々な企画ツアーを開催している。それぞれのコースに独特なテーマとタイトルを設定し、「謎解き」の感覚で散策する形式となっている。

過去に開催された企画展の例

テーマ	内容
地蔵と松虫—阿蘇火山と生物多様性	秋にはマツムシソウが揺れる南外輪山・地蔵峠。かつては南郷谷と熊本市内方面とを結ぶ重要な峠道であった。「地蔵峠」の名に隠された地名の由来や山野草、美しい草原からブナ林への遷移を知る自然観察・山登りツアー。
えんしゃん坂—水の生まれる里の水めぐり	水の生まれる里で有名な白水地域には地元の人たちから「えんしゃん」と呼ばれる坂がある。この坂の周囲に存在する様々な「水」を訪ねながら、阿蘇火山と人々の暮らしの関わりを9万年前から現在にかけて巡るツアー。
闘う田楽—阿蘇火山と高森田楽	最も阿蘇の火山灰と闘ってきた地域の一つである上色見を歩きながら、この地区の人々が厳しい環境とどう闘ってきたのか、そしてどんな豊かな文化を展開させたのかをたどるツアー。
冬のツル—南北阿蘇の合わせ鏡	阿蘇神話にまつわる土地がたくさんある北阿蘇と南阿蘇。南北に広がる壮大な神話に思いを馳せながら、根子岳や南外輪山に囲まれる美しい里山を巡るツアー。
半夏は待つな—アスパラガスと石庖丁	中世の城があったといわれる白禿山が象徴的な原尻地区は弥生時代の石包丁も発掘され、牧野に続く石畳道も残ることから、長く稲作と畜産で栄えたことを物語る。縄文から平成までの阿蘇の変化を一気に巡るツアー。
イーとカセー村落共同体と相互扶助	白川の流れを眼下に、妙見さんの清水が集落を巡る加勢地区。田植え、牛飼、道づくり、お祭り、防災、消防等、この山間の小さな村を歩きながらかつてどこにでもあったイー(相互扶助)の暮らしをふり返るツアー。

③ 特別展(谷人ツーリズム)

谷人ツーリズムは、特に修学旅行などで阿蘇を訪れる学校関係者に向けた特別なプログラムである。実際に阿蘇で生活をしている谷人、特に農家を中心として紹介し、その谷人の家に短期間のホームステイをすることで、阿蘇の暮らしや自然との関わりを学ぼうというものである。

実施する学校は、谷人の家にホームステイする当日まで阿蘇についての事前学習をし、体験をし



谷人ツーリズムの様子

た後には、体験の中で見つけたテーマを掘り下げて話し合い発表にまとめるところまでを一連の

流れとして行う。

4 たざわこ芸術村

秋田県 仙北市

(1)地域の概要

仙北市は、秋田県の東部中央に位置し、岩手県と隣接している地域で、平成17年9月に旧田沢湖町、旧角館町、旧西木村が合併し誕生した。市のほぼ中央に水深が日本一である田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南は仙北平野へと開けている。たざわこ芸術村は、劇団わらび座の本拠地としてわらび劇場を中心に仙北市に展開するエンターテインメントリゾート施設である。人と文化の出会いと交流の場として、芸術・芸能・ホテル・温泉・地ビール・工芸・郷土料理を丸ごと満喫できるリフレッシュゾーンとして親しまれ、他には例のない“アート・ヴィレッジ(芸術村)”となっている。

(2)たざわこ芸術村の概要

①施設構成・活動内容

たざわこ芸術村は、(株)わらび座によって1996年にオープンした文化と観光を結合した本格的なエンターテインメントリゾート施設である。ホテル、温泉、地ビールレストラン、森林工芸館などを併せもち、中核となるわらび劇場では、東北の素材を生かしたオリジナル・ミュージカルの制作・上演をはじめ、民族舞踊・太鼓・演劇・健康体操など様々なワークショップも行っている。

②わらび座の概要

劇団わらび座は1951年に創立した民族伝統をベースに、多彩な表現で現代の心を描く劇団である。民謡の宝庫と呼ばれる秋田県仙北市にホームベースを置き、現在、7つの公演、グループで年間約1,200回の公演を全国で行っている。海外公演は、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、ブラジルなど16カ国の実績をもっている。

「わらび座公演は文化振興の一環であり、地域発信、地域づくりに結びつくもの」として、自治体やホール、マスコミなど各種団体や地元有志の実行委員会の主催など、様々な形態で行われている。また、出演者によるワークショップ、交流会、バックステージ体験、文化講演会、観光物産展など、公演開催とあわせてのアウトリーチ事業にも力を入れている。

教育と文化の接点で取り組まれてきた「わらび座への修学旅行」は35年以上の歴史を持ち、毎年150校2万人の子どもたちが、たざわこ芸術村を訪れ、ソーラン節や農作業を体験している。また、たざわこ芸術村は「地域でのアート・ボランティア」システムを図り、地域共生・市民参加の運営をめざす他、社会貢献プログラムも追求している。

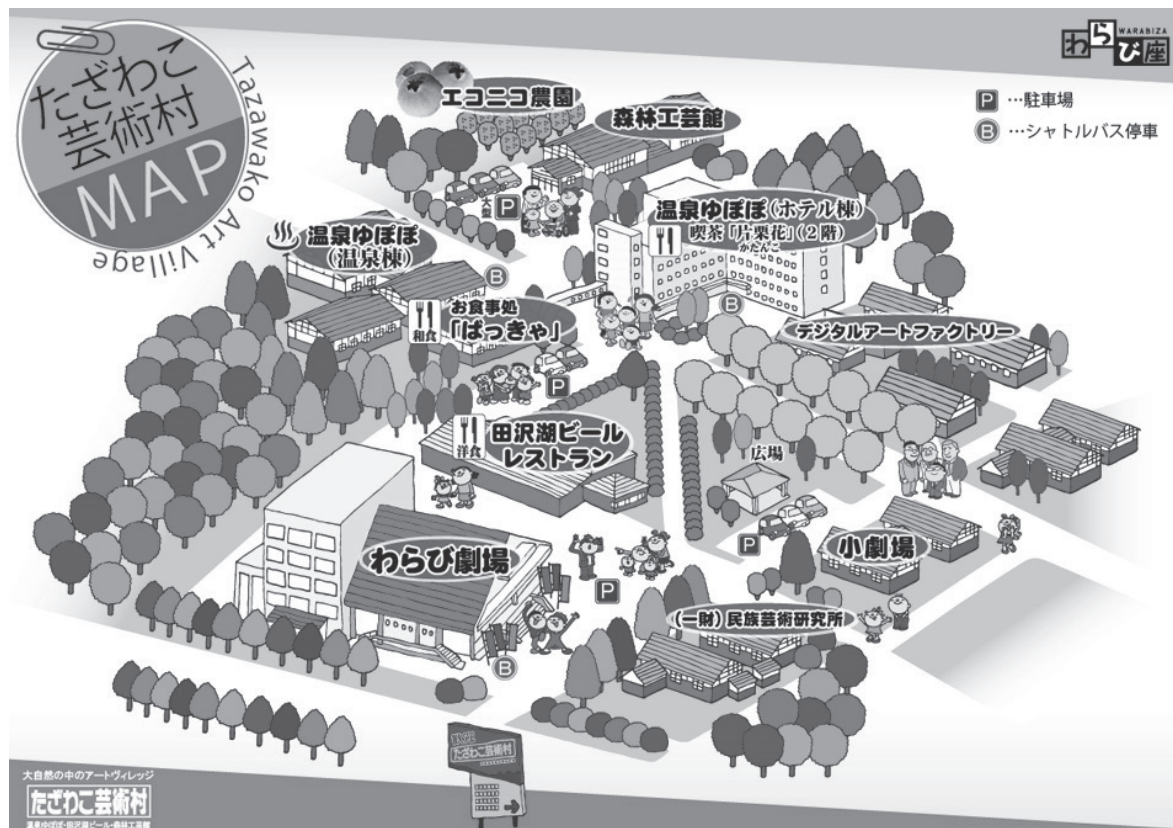


地域との共生で進めてきたこれらの活動に対して、1989年に秋田県芸術文化賞、1994年に文部大臣による地域文化功労者表彰、その他多くの受賞を受けている。

たざわこ芸術村施設構成

施設構成	内容	
体験活動	わらび劇場	わらび劇場は1974年8月10日に誕生。劇団わらび座の専用劇場として幕を開けました。現在はリージョナルシアター(地域劇場)として、オリジナル作品の制作・上演、ワークショップ、貸館事業など、幅広い活動を展開しています。
	ニコニコ農園	森林工芸館の横にあるエコニコ農園では、7月～8月上旬にかけて、ブルーベリーの摘み取り体験ができる。
	森林工芸館	木工品や陶芸品、オカリナ教室までバリエーション豊かな手作り作品に挑戦できる。
	一般財団法人民俗芸術研究所	劇団わらび座の創造活動の中から生み出され(1969年)、その後(1974年)財団法人の認可を受けて設立された、民俗芸術に関する専門の研究機関です。日本の民謡・民俗芸能等の資料を保存し、資料の公開や文化公演も行っている。
	ソーラン節ワークショップ	教育と文化の接点で取り組まれた「わらび座への修学旅行」では、通算30万人の生徒を迎え、観劇と踊りのワークショップを行っている。
宿泊施設	温泉ゆぼぼ、(施設外/系列)川口温泉奥羽山荘、奥羽山荘離れあか松庵、男鹿桜島リゾートきららか、ゆぼぼ山荘	
飲食施設	田沢湖ビールレストラン、お食事処ばっきゃ、(施設外/系列)あきた海鮮食堂、お食事処入風、秋田ふるさと村内お食事処ばっきゃ	

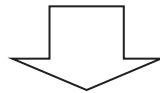
たざわこ芸術村MAP



4-3. 事例から得られる視点

①歴史上の人物を活用したまちづくりの事例

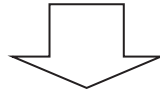
- ご当地の出身者や居住者など歴史上の人物をまちづくり、地域おこしに活かそうとする事例は多いが、活用手法はまちまちであり、効果も各ケースによって異なる。
- イベントやPRに活用したり、キャラクターグッズや特産品に結び付けて地場産業化したりするケースが多い。
- 人物の作品をオブジェ化して、地域の知名度アップにつなげようとする場合もある。
- 映画やテレビドラマなどに取り上げられたことをきっかけに取り組まれることが多い。
- 行政主導のイベント型ではなく、住民主導で地道な取り組みを進め、偉人の教訓が生活態度に根づいているケースもある。



対外的なPRを目的とするばかりでなく、住民が偉人のことをもっと詳しく学んだりするような、足を掘り起こす対内的取り組みも平行して進める必要がある。

②エコ・ミュージアムの事例

- エコ・ミュージアムに取り組む地域は少なからずあるが、明確な形態があるわけではなく、様々なタイプが存在しており、一からげにした定義や一律の評価が難しい。「コンセプトが未消化のまま言葉が先行したきらいは否めない」と評されている。
- 自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することが趣旨であり、特別に何かを整備したりするわけでないため、エコ・ミュージアムを楽しむには訪問者の問題意識が問われる。そのため、各種メディアに取り上げられるようなわかりやすい成果を上げているところは少ない。
- 住民が学芸員のように地域をガイドするのが望ましいが、一部のリーダー的人材の参加はみられるものの、住民参加の底辺が広がっているケースは少なく、サテライトミュージアムに位置づけられる各地域の魅力づくり・個性化に苦戦している。



来訪者も地域住民も生きた形で生活文化を学習するエコ・ミュージアムの理念を活かし、対外的な取り組みと対内的な取り組みを組み合わせ、「地域が元気になる＝外部からの興味が増す」というような好循環のサイクルを作り上げる必要がある。